

ロングディスタンス世界選手権 カナダペンティクトン大会

2017年8月27日

佐世保市 原口歩

この度のレースに出場するにあたり、参加する事をギリギリ迄迷いましたが、同じ佐世保のチームメイト達から既に出場経験がある私と一緒にの方が心強いからとの誘いがあり、また私自身も40歳台最後のレースという事もある事あって職場や周りの知人、友人の理解と協力を受けて参加させて頂きました。カナダにはJTU日本選手団のオフィシャルツアーで行くのが普通ですが、少しでも費用を抑える為に自分達で手配して行こうとなり、チームメイトの深江さんが渡航の手続き、トロージーさんが宿泊場所の手続きをして頂き、どのツアー会社にも負けないエスコートによりカナダ迄無事に行く事が出来ました。

8月23日(水)

カナダのバンクーバーに到着後50人乗りのボンバルディア機に乗り換えて約50分でペンティクトンに到着。第一声は「暑い!」。周囲を山に囲まれ、湖を中心にした田舎のリゾート地といった所。黄桃とワインが街の名産品。18日から世界マルチスポーツのイベントが毎日行われていた為か既に大会の雰囲気は感じられる。5日後には自分達がこの場所で主役になっている事を思い浮かべながらレンタカーを借り、スーパーで買い出しをして街から車で40分走ってAPEXスキーリゾートの貸別荘へ向かった。

8月24日(木)

標高1700Mにある宿は朝の気温4度。しかし街に降りると30度超えている。しかも風が強くてレース会場の湖には白波が立ち、かなりうねっていたが試泳を試してみた。水温、水質は申し分無し。後は地元の人が「明日からは風も止んでくるよ!」と言う言葉を信じるのみ。

8月25日(金)

JTUオフィシャルツアーの日本選手団約80名と合流。今回のロングディスタンスの部だけで103名の日本人選手。開催国カナダに次いで2番目に多い参加者で、夕方から行われるパスタパーティーの前に撮った集合写真はさながら修学旅行のようでした。

8月26日(土)

明日のレースに向けて自転車の委託に行く。バイクトランジットの会場では沢山の高齢のボランティアが活躍され、笑顔で私達を歓迎してくれました。

また、自転車にモーターが内蔵されていないか抜き打ちチェックを受けている場面を初めて見て、改めてこのレースのクオリティの高さを実感しました。

8月27日(日)

いよいよ本番当日。前日あまり寝つきが良くなかったが午前3時半に出発して一番乗りで会場へ着く。心配した風は全く無く水面も穏やか。ただ日中は暑くなる事を覚悟の上でスタートの準備に取りかかる。4分置きのウェーブスタートで、私は一番最後の女性45歳以上で区切られたグループ。見渡すと世界中から集まったおばちゃんアスリート達が150名ほど。みんなシミやシワだらけなのに生き生きとした表情でスタートの号砲を待っている。

○SWIM… 3k

女性だけのスタートだったのでバトルもなく、朝日が眩しくてブイが見えにくい所もありましたがいつもの調子で泳げました。陸に上がると脱ぎにくいウエットスーツをボランティアスタッフのイケメン君から脱ぐのを手伝ってもらってハイテンションのままバイクスタートへ。

○BIKE… 120k

レイクサイドのフラットな道路でまずはウォーミングアップ。暖まったところで周回コースに突入。登りも普段練習している所に比べれば多く無く、景色も良くて綺麗な湖や牧場、葡萄畑など見られました。ただ2周目に入ると1周目までいたボランティアの誘導員が所々いなくなっていました。おそらく昼食で家に帰ってしまったのだと思います。日本では考えられない事ですが、それはお国柄でしょうね。

○RUN… 30k

全て街中を走るコースだった為終始応援が途切れる事無く、また折り返しも多いので選手同士お互いに励まし合いながら走れました。カタコトの日本語で応援してくれる人もかなりいて、心配していた暑さも2周目からは和らいできました。ペースもあまり落とす事無く最後は久しぶりにウルッと来そうでしたが笑顔でフィニッシュ! ゴール後もやはり高齢のボランティアが大活躍。冷たい濡れタオルと完走メダルを貰い、とりあえずビールを飲みながら後の人を待つ。そして、佐世保から参加したチーム FREE のメンバー7人全員が無事完走!!

8月28日(月)

昨日のレースの疲れをさて置き、宿から山頂の2174mまでトレッキング開始。カナダの大自然を一望して夕方からは地元のワイナリーで少し贅沢なディナーで祝杯。

今回の世界選手権はオフィシャルツアーで行くとただ付いて行くだけで楽なのですが、あえて自分達で手配して行った事に多くの収穫がありました。渡航の手続き、宿の予約、レンタカーの手配、運転、通訳、食事の準備、選手間交流、応援、などチームメイトそれぞれが得意分野を生かして頑張り、いろんなアクシデントもありましたが今ではそれも楽しい土産話になりました。

これからも歳をとるにつれ周囲に助けられながらやって行く事が多くなると思いますが、感謝の気持ちを忘れずに少しでも長くこの競技を続けられればいいなと思います。

